加賀前田家
ゆかりの町民文化が
花咲くまち
日本遺産
高岡
—人、技、心—

歴史都市高岡
日本遺産と旧町名
副読本

日本遺産

高岡の歴史と文化の物語が、日本遺産に認定。

「日本遺産」とは、日本の文化や歴史を世界にアピールするために、魅力のある文化や伝統などを全国から選んで文化庁が認定するものです。

平成27年に、第1弾18件が発表され、高岡市の「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡ー人、技、心ー」が認定されました。

日本遺産は、建物や場所が認定されるのではなく、文化や伝統を物語る「ストーリー」が認定されます。認定された高岡のストーリーをみてみましょう。

高岡御車山祭

「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡ー人、技、心ー」

4つの物語に分かれているよ。

1. 高岡城と城下町の形成「お城と町ができた！」

高岡は、加賀前田家二代当主前田利長がつくったまちです。「この地は敵に攻められにくく、港や道など物の行き来にも便利な場所だ」。そう見抜いた利長は、慶長14(1609)年、城を築き、城下町が栄える基礎をつくりました。

しかし、利長は、高岡城ができてわずか5年で亡くなってしまいます。その後、幕府は一国一城令を出し、高岡城は廃城となりました。

2. 城下町から商工業都市への変換「ものが集まるまちをつくろう！」

三代当主利常は、失われるおそれのあった高岡のまちを立て直します。町民が高岡から出ることを禁止し、高岡に魚や塩の問屋を作らせ、城あとには米蔵と塩蔵を置きました。

利常は利長の思いを受けつぎ、高岡を商工業のまちへと生まれ変わらせました。また、利長を弔うお寺として「瑞龍寺」を建て、町の繁栄を願いました。

高岡古城公園

3. 高岡の近代化「高い技でつくろう！」

高岡は、ものづくりのまちとして発展していきます。鋳物の職人たちは、美しい銅器製品をつくるようになり、全国各地に販売されました。高岡には越中全体の物が集まり、伏木港より運びだされ、高岡は「加賀藩の台所」と言われるようになりました。

また、高岡御車山祭は、利長が町民に山車を与えたことが始まりとされ、高岡の伝統工芸の技を集めてつくられた御車山は、町民たちの心意気をしめすものです。

4. 町民の心意気とものづくりの職人魂「明治以降だって輝きつづけるよ！」

明治になっても、町民は自分たちで高岡のまちをさらに発展させてきました。

高岡の伝統産業は技術とデザインをより高め、町並みや人々の職業や伝統行事などにも、高岡町民の歩みが強く残っています。このまちに住む人々の心や記憶のなかには、400年の時が受けつがれているのです。

「日本遺産」の構成文化財30

1 瑞龍寺
国宝・重要文化財（建造物）

高岡開町の祖、前田利長の菩提を弔うために建てられた曹洞宗寺院。外様大名の菩提寺としては壮大過ぎるとされるその理由には、前田利常にとっては、自身を次期藩主へ抜擢してくれたことに対する並々ならぬ恩義があったことや、高岡の町民に長く利長の遺徳をしのばせ、併せて町の繁栄を授ける意図を託したものと考えられる。

2 前田利長墓所
国指定史跡

総面積約1万坪は、近世大名の個人墓所としては破格の規模を誇るものである。前田利常により造営され、瑞龍寺と墓所をつなぐ道路である八丁道と併せて整備された。ともに前田利長をしのぶ意志が込められている。

3 五福町神明社本殿
市指定文化財（建造物）

慶安5年（1652）前田利常によって前田利長墓所に建てられた鎮守堂の遺構で、瑞龍寺の造営と並行するものであったことが明らかとなっている。この場所へは明治初年に移築された。

4 大手町神明社拝殿
市指定文化財（建造物）

五福町神明社本殿と同じく前田利長墓所に建てられた拝殿であり、明治維新による廃仏毀釈と神仏分離の動きを受けて分割して移築されたものである。

5 高岡城跡
国指定史跡

築城技術が高度に発達した近世初頭の縄張り（水堀・郭）をほぼ完全な姿で留めている城跡である。廃城となった後も、本丸の殿閣跡に新しく米・塩の倉庫が建てられたことで城跡の荒廃を防ぐとともに、城下町から商工の町に転向する第一歩を歩んだ。

6 前田利長公御親書
市指定文化財（古文書）

高岡城の築城と城下町の建設に先立ち、その資材となる物資集散地として町立てした木町の成立に際し利長の厚い保護のあったことを示す史料である。木町は、高岡の玄関口として重要な役割を果たしてきた。

木町神社蔵

7 高岡御車山
重要有形民俗文化財

高岡御車山は、7基の山車で構成される。車輪や高欄には名工の手による高岡金工・漆工の粋を集めた装飾が施され、「動く美術館」とも呼ばれる。当初素朴な山車は、財力のある豪商たちが町ごとに競い合うなかで絢爛豪華なものとなった。

8 高岡御車山祭の御車山行事
重要無形民俗文化財

2016「ユネスコ無形文化遺産」登録候補

お祭りを盛大に行うのは加賀藩の政策であり、町民にとっては神様に感謝祈念を込める行事であった。町民自身が楽しむために自らの富を投資し、地域経済を動かしていたことが分かる代表的な行事である。

9 与四兵衛顕彰碑
（弥眞進大人命旧跡）

津幡屋与四兵衛は、御車山と類似の山を作った近郊の町との騒動の際に、御車山の由緒を死守しようとした義人として山町の人々から崇められている。毎年4月3日に祭祀が行われている。

10 明和八年製高岡町図
市指定文化財（古文書）

高岡の町図としては、現存する最古の部類の町図であり、明和年間の高岡町の町名、街区、用水の状況、高岡城跡などが明記されている。所在地を明確にするとともに、米納地子地も記載されていることから、当時の農業生産力を知ることもできる重要な史料である。

高岡市立中央図書館蔵

11 山町筋

重要伝統的建造物群保存地区

重厚かつ繊細な意匠を持つ土蔵造りの伝統的建造物が立ち並ぶ地区であり、近代初頭には米商会所が置かれ、原綿市場の拠点として高岡の経済的な発展に大きく貢献した。高岡御車山を所有・継承していることから「山町」と呼ばれている。

12 菅野家住宅

重要文化財（建造物）

菅野家住宅は、町家が多く残る山町筋の建物の中でも、大規模で質の高いものとして評価を受けている。高岡政財界の中心的な存在として財を築き、明治33年の大火直後に建築された高岡の土蔵造り建物の代表格である。

13 筏井家住宅

県指定文化財（建造物）

筏井家住宅は、在来の町家にみられる伝統的技法を踏襲しながらも、塗壁による防火構造、洋風の構造・意匠を導入した建造物として貴重なものである。代々、綿糸などの卸商を営んでいた商家であり、山町の発展に寄与してきた。

14 土蔵造りのまち資料館（旧室崎家住宅）

市指定文化財（建造物）

旧室崎家住宅は、土蔵造りの大規模な町家の例であり、背後の土蔵や庭など、屋敷の様子も旧状をよく留めている。もとは綿糸や綿布の卸商を営んでおり、今では資料館として公開されている。

15 金屋町

重要伝統的建造物群保存地区

金屋町は、高岡開町に際し前田利長が鋳物師を招き、鋳物づくりを行わせたことに始まる鋳物師町である。明治時代に入り、職人の技術が伝えられて装飾品や美術工芸品として銅鋳物が作られ、一大生産地としての発展を遂げた。

16 仁安の御綸旨

市指定文化財（古文書）

鋳物師に対して全国に鍋・釜・鍬・鋤を販売することを命じ、そのため諸役を免除し全国通行の自由を保証した御綸旨であり、この御綸旨を活かして鋳物業に従事してきたことが窺える。

金屋町公民館蔵

17 前田利長書状

市指定文化財（古文書）

前田利長が高岡へ居城を移す際に、側近に命じた内容が記された史料である。金屋町の発祥を示すだけでなく、町割りが武家地の屋敷割と同じ頃に行われていることを示しており、城下における金屋町の高い位置付けを指摘できる重要なものである。

高岡市立博物館蔵

18 有磯正八幡宮（本殿・釣殿・拝殿及び弊殿）

登録有形文化財（建造物）

金屋の氏神として、石凝姥命を祀っている。今も鋳物師たちの信仰を集めるものとして、「鍋宮様」とも呼ばれ、年に一度「御印祭」を行っている。祭には、前田利長の遺徳を偲ぶとともに、長く続いてきた鋳物業への感謝の意も含まれる。

19 銅造阿弥陀如来坐像

市指定文化財（彫刻）

高岡大仏として市民に親しまれている青銅製大仏であるが、元は木造であった。途中、資金難により青銅製大仏での造立が中断するも、銅器職人の協力と、市民の浄財により1933年、開眼供養に至った姿には、町民の誇りが垣間見える。

20 高岡鋳物の製作用具及び製品

登録有形民俗文化財

金屋町を中心に、江戸時代以来行われてきた鋳物製作に用いられた用具類とその製品を収集したものである。高岡鋳物の製作技法の変遷をよく示す多様な用具が収集されており、鋳物生産の実態を示す貴重な史料である。

高岡市教育委員会文化財課提供

旧町名ってなあに？

旧町名とは

昔の高岡市の町名には住んでいた人たちの職種をあらわす「油町」や「桶屋町」、土地の形や位置をあらわす「立横町」や「上川原町」などがあり、町の特徴がとてもわかりやすい名前がついていました。

ところが、訪問先を探し当てたり郵便物を配達するのが困難だったため、昭和37年、「住居表示に関する法律」が制定されると、高岡市でも昭和41年から昭和52年にかけて、たくさんの旧町名が新町名へと整理・統合されていきました。

また、旧町名は過去の歴史や文化を伝える大切な文化遺産です。現在、高岡市をはじめ、全国で旧町名復活へ向けて取り組みを行っている地域もあります。

旧町名の由来やその町のエピソードを知って、高岡町民の文化を垣間見てください。もしかしたら自分たちの知らない高岡の歴史に出会えるかもしれません。

前田利長公像

瑞龍寺

江戸時代末期の高岡町

〈推定〉

「本町」とは

各地から移り住んできた町民には、建物を建てるための土地が無料で提供されて土地代が免除される特権が与えられました。
このような土地を役地といい、役地にできた町を本町といいます。

横町　関町　二丁町　下川原町　袋町　小馬出町
御馬出町　定塚町　通町　坂下町　川原上町　片原町
堀上町　梶原淵町　鶴島町　源平板屋町　平米町
開発町　白銀町　土器町　木町　油町　下桶屋町
桶屋町　千木屋町　伝物屋町　旅籠町　博労曇町
利原町　風呂屋町　木舟町　守山町　三番町　二番町
一番町　計35町

「地子町」とは

一国一城令によって衰退した高岡を商工業の町へと再生させるために、三代藩主利常は町人の転出を禁止し、魚問屋・塩問屋などを創設。商工業が繁栄し人口が増加するとともに地子地（家臣たちの屋敷跡で高岡への地税を課せられた土地）に家が建てられました。これを地子町といいます。

上川原町　中川原町　一番新町　二番新町　立横町
地子木町　片原中島町　片原横町　白銀後町　大工町
大工中町　大鋸屋町　蓮光寺門前　神宝町　鶴島下町
教恩寺下町　橋番町　横川原町　計18町

「散町」とは

町の中心から離れたところに散在する町は、人口が変わりやすく、散町として区別されました。

横田町　中島町　金屋町　母衣町　純手中町　純手下町
宮脇町　新横町　横田新町　計9町

・地子町18町、散町9町の情報は安政6年（1859）中条屋六郎右衛門（川上三六）『高府安政録』によった。
・『高岡市史』中巻（昭和38年）、『富山県の地名』（平凡社、平成6年）などによった。
・原図は明治42年『高岡史料』下巻付属図に基づいた。

高岡市立博物館 常設展ガイドブックより転載し一部加筆

旧町名で読み取る物語

旧町名は、本町・地子町・散町に区分されます。
それぞれの町名には由来があり、町名からその町の歴史を読み取ることができます。

- 本町
- 地子町
- 散町

※散町とは、本町を離れて各所に散在する町のこと。

〈旧町名一覧〉

成立順を表す町名

- 一番町（いちばんまち） P.9
- 二番町（にばんまち） P.9
- 三番町（さんばんまち） P.9
- 一番新町（いちばんしんまち） P.9
- 二番新町（にばんしんまち） P.10

旧城下を表す町名

- 守山町（もりやままち） P.10
- 木舟町（きふねまち） P.10

職種を表す町名

- 金屋町（かなやまち） P.10
- 風呂屋町（ふろやちょう） P.11
- 利屋町（とぎやまち） P.11
- 博労畳町（ばくろうたたみちょう） P.11
- 旅籠町（はたごまち） P.11
- 檜物屋町（ひものやちょう） P.12
- 千木屋町（せんぎやちょう） P.12
- 桶屋町（おけやちょう） P.12
- 下桶屋町（しもおけやちょう） P.12
- 油町（あぶらちょう） P.13
- 木町（きまち） P.13
- 土器町（かわらけまち） P.13
- 白銀町（しろがねちょう） P.13
- 平米町（ひらまいちょう） P.8
- 大工町（だいくまち） P.14
- 大工中町（だいくなかまち） P.14
- 大鋸屋町（おがやちょう） P.14
- 橋番町（はしばんちょう） P.14
- 神主町（かんぬしまち） P.15
- 毋衣町（ほろまち） P.15

人名による町名

- 源平板屋町（げんぺいいたやちょう） P.15
- 鴨島町（かもじままち） P.15
- 梶原淵町（かじわらふちまち） P.16

地形による町名

- 堀上町（ほりかみちょう） P.16
- 片原町（かたはらまち） P.16
- 川原上町（かわらかみちょう） P.16
- 下川原町（しもがわらまち） P.17
- 坂下町（さかしたまち） P.17
- 定塚町（じょうづかまち） P.17
- 片原中島町（かたはらなかじままち） P.17
- 中島町（なかじままち） P.18
- 縄手中町（のうてなかまち） P.18
- 縄手下町（のうてしたまち） P.18

軍事施設による町名

- 御馬出町（おんまだしまち） P.18
- 小馬出町（こんまだしまち） P.19

人口増による町名

- 地子木町（じしきまち） P.19
- 横川原町（よこがわらまち） P.19
- 横田町（よこたまち） P.19
- 横田新町（よこたしんまち） P.20

道の役割による町名

- 通町（とおりまち） P.20
- 袋町（ふくろちょう） P.8
- 立横町（たてよこまち） P.20

町の立地による町名

- 白銀後町（しろがねごちょう） P.20
- 上川原町（かみがわらまち） P.21
- 中川原町（なかがわらまち） P.21
- 片原横町（かたはらよこまち） P.21
- 蓮光寺門前（れんこうじもんぜん） P.21
- 教恩寺下町（きょうおんじしたまち） P.22
- 鴨島下町（かもじましたまち） P.22
- 宮脇町（みやわきちょう） P.22
- 新横町（しんよこまち） P.22

その他

- 開発町（かいほつまち） P.23
- 二丁町（にちょうまち） P.23
- 関町（せきまち） P.23
- 横町（よこまち） P.23

2015年4月 2つの町名が復活しました！

近年、歴史や文化を伝える大切な文化遺産でもある旧町名を忘れてはいけないと、全国で復活に向けて運動が行われはじめました。
石川県金沢市では平成11年に全国初の旧町名復活となった「主計町」をはじめ、今までに11の旧町名が復活しています。
高岡市では平成23年に「歴史都市」の認定を受けて、旧町名復活へ向けた取り組みを始め、平成27年4月に2つの町名が復活しました。

職種を表す町名

平米町〈ひらまいちょう〉

◆ 町名の由来

砺波郡常国村の百姓長兵衛などが開いた町で、初めは「平吹町」といいましたが、1681年、「平米町」になりました。藩の作業に携わる者が多く、その報酬として与えられる米を「お平米」といったことによります。

高岡城へ行く重要な場所に位置するため、2か所に「木戸」が設けられ、1か所は夜間の通行が禁止されていました。1894年、街道に初の公衆便所が設置された町のひとつです。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

幕末のころ、当町を中心に下桶屋町から北の町々で、傘作りが盛んに行われました。1861～64年のころから、一般庶民も傘をさすことが許されたからで、1864年には、高岡町中で4,500人が従事していました。高岡の傘は加越能三州はもとより、信州・越後方面にも売られ、高岡の特産品のひとつでした。

復活

平米町自治会は、平成26年7月17日、高岡市長に旧町名復活に関する申出書を提出して、具体的に手続きを進めるようにお願いしました。これにより平成27年4月20日付で変更されました。

道の役割による町名

袋町〈ふくろちょう〉

◆ 町名の由来

高岡が開町した時からの本町で、横町、平米町の西側にあり、両町に並行して延びています。

町の形が細長く、その昔は出入り口が1か所しかない袋小路のようだったことから名付けられました。1967年まで袋町の名前が使われていました。

1704年頃、すでに警備のための「木戸」が2か所に設けられていました。

1821年、上川原町から出た火が大火となり、全町87軒と正覚寺を焼失しました。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

復活

袋町自治会は、平成26年6月11日、高岡市長に旧町名復活に関する申出書を提出して、具体的に手続きを進めるようにお願いしました。高岡市では初めてです。これにより平成27年4月20日付で変更されました。

成立順を表す町名

一番町〈いちばんまち〉

◆町名の由来

高岡中心部で一番目に町立てしたことによります。源平板屋町、三番町とともに一番街通りと名づけられています。　1767年、一番町付近からの出火が片原町にも飛火したため、130軒を焼失する大きな火事となりました。

エピソード

この町には、1873年に測量した一番町の地図が大切に保管されています。
それには、地番や名前、間口と奥行きなどが書かれ、各家庭の排水は家の前ではなく背後を流れていたことがわかります。通りの道幅は約6.6mと広く、戸数は60軒。通りの東端には、服部嘉十郎の家があります。服部嘉十郎は、明治時代、高岡城跡を払い下げるという命令が出た時、公園にすることを願い出た人です。

成立順を表す町名

二番町〈にばんまち〉

◆町名の由来

砺波郡答野島村（今の国吉）の百姓平六などが、二番目に町立てしたことによります。
1652年、政治上の事務を行う役所「奉行所」が、二番町に設置されています。また、野菜や果物の取引もこの町で行われていました。1889年、町会所跡に最初の高岡市役所が設置されました。

町会所・奉行所 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

二番町の御車山は他の6基とは異なる特徴をいくつか持っています。6基は車輪が4輪あるのに対して、2輪であることや、豊臣秀吉の紋である「桐紋」を、鉾留や車輪金具などに用いていることです。1767年、三番町付近からの出火で「奉行所」が焼けてしまい、再建されましたが、この時から「奉行所」の名を改め、「高岡町会所」としました。二番町の南西端で現在の永明寺の所です。

成立順を表す町名

三番町〈さんばんまち〉

◆町名の由来

氷見屋長助、田子屋権五郎、角屋六兵衛などが、高岡で三番目に町を開いたことによります。

エピソード

三番町には、正直で気立てがよく、近所の人を大切にする人々が多かったのか、人々のよい行いを記した「高岡湯話」（富田徳風著 1807年刊）に4名の記事があります。
1763年、瑞龍寺において利長公の150回忌法要が盛大に行われたとき、旅籠（旅館）だけでは足りず、武士や僧侶は町々の大きな家や寺院に分かれて宿泊したといいます。石塚屋清五郎という人の家に、御料理人の原田市郎左衛門など3名が宿泊した記録があります。

成立順を表す町名

一番新町〈いちばんしんまち〉

◆町名の由来

江戸時代、一番にできた新町で、射水郡江尻村の藤兵衛らによって開かれました。二番新町とともに四十物町ともよばれました。「四十物」とは、塩干魚のことです。
屋号では、地名に由来するものが多く、砺波郡、射水郡の村名がほとんどです。農家の次男や三男が、各村々から寄り集まって成立した町として考えられます。

エピソード

1800年、当町と中川原町の間から出火し、9か町におよぶ大火となり、一番新町は94軒焼失しました。
また、1859年には千保川の洪水で、床上浸水13軒、床下浸水42軒に及びました。

成立順を表す町名

二番新町〈にばんしんまち〉

◆町名の由来

1615年に高岡城が廃城になった後、家臣の屋敷跡地に、二番町の人々によって開かれました。

1960年、県道が整備され、事業所などが建つようになりました。今の川原町、川原本町になります。

エピソード

二番新町は、千保川の右岸にあり、東側に並行して一番新町があります。二番町に住む者の分家の次郎九郎が米の小売商を始め、町として発展したといいます。

塩干物の干場に恵まれ、生魚のほか、塩干魚を取り扱う商人が集中し、一番新町とともに四十物町ともよばれました。1821年の高岡大火、1859年の千保川の洪水で、相次いで被害にあいました。

旧城下を表す町名

守山町〈もりやままち〉

◆町名の由来

二上山にある守山城のふもと、守山村から人々が移ってできました。

北陸道筋にあり、木舟町、小馬出町とともに「通り筋三町」とも呼ばれ、中心問屋街でした。町の入口に「木戸」が設けられていました。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

旧里に由来する梃釘抜紋入り提灯

エピソード

町なかを通る往還道（今の国道にあたる）の幅は約6.4m、利屋町や一番町へ通じる脇道でも5m～6mです。道路は碁盤の目のように走り、町並みは整然と区画されました。利長時代の町づくりは、400年後の今も生きています。

横町屋、関屋、中田屋、蝋燭屋、布屋などの屋号をもつ大店が並んでいました。

旧城下を表す町名

木舟町〈きふねまち〉

◆町名の由来

1609年に前田利長が高岡町を作ったとき、砺波郡木舟村（今の高岡市福岡町木舟）から善右衛門、宗三郎、四郎兵衛、三六、源兵衛など20軒あまりが引っ越し、思い思いの商売を始めました。移り住んだ人々が故郷を恋しく思い、木舟町と名づけました。

木舟城跡

エピソード

砺波郡木舟には、平安時代末に木舟城が築城され、代々石黒氏が住んでいました。

1585年、豊臣秀吉が越中を制圧すると、部下であった前田利長には、砺波、射水、婦負の三郡が与えられ、利長は守山城を本拠とします。木舟城は前田秀継（利長の叔父）が守りました。ところが同年の天正大地震で木舟城は倒れ、秀継夫妻はじめ家臣など大勢の人が亡くなり、城下町もほろんでしまいました。

職種を表す町名

金屋町〈かなやまち〉

◆町名の由来

1611年、砺波郡西部金屋から鋳物師7人が招かれ、千保川左岸に屋敷地を与えられてできたと伝わる町です。

はじめ5か所の鋳物工場があり、火災の危険があることから、本町とは千保川をはさんでいます。金屋町が発展したのは前田利長の親書があったからであり、毎年6月20日に御印祭を行い、利長の恩に感謝を示しています。

拝領地 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

金屋町は明治に入るまで「拝領地」と呼ばれ、本町とする説もあります。諸役（納税や労役）免除、交通自由、山林竹木伐採の特権を与えられていました。1615年の高岡廃城後も藩の保護を受け、横田村から請地して町を拡張するなど、金屋町は次第に発展していきました。

職種を表す町名

風呂屋町〈ふろやちょう〉

◆ 町名の由来

1609年、高岡築城のとき、近くから寄せられた農民が風呂屋を始めたことによります。

風呂屋町は、当初、今の片原町のところにありましたが、後に現地へ移されました。高岡廃城後も本町の1つとして、税金がかからないという特権を与えられ、「町奉行」の支配を受けていました。町の入り口には「木戸」が設けられていました。

1785年の戸数は34軒、1872年の数は52軒に増加しています。

木戸・町奉行 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

5月10日の川巴良諏訪神社の春季例大祭では、よろいやかぶと、母衣（よろいの背につける布でおおった籠）が飾られます。風呂屋町の母衣武者は前田利家の名前になっています。母衣武者渡御（行列）が行われていた頃は、専称寺の前で行装を整えたといいます。

職種を表す町名

利屋町〈とぎやまち〉

◆ 町名の由来

山城の国より、刀鍛冶の一門が移って開いた町です。研屋町とも書いていました。

高岡町の中心にあたり、大法寺の前には江戸期の半ばまで「高札場」が置かれ、明治になってからも隣町との距離を示す「里程元標」が置かれていました。

北陸道が通町から御馬出町へ直角に折れる地点であり、まっすぐに進むと高岡城の前線基地「升形の内」がありました。利屋町にはその守りとなる寺院が4つ置かれていました。

升形・高札場 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

利屋町には、大法寺（日蓮宗）、龍雲寺（曹洞宗）、専福寺（浄土真宗）、聖安寺（浄土真宗）の4か寺があり、ともに前田利長に呼び寄せられ、高岡町へ移り住みました。

職種を表す町名　《現行の博労町自治会》

博労畳町〈ばくろうたたみちょう〉

◆ 町名の由来

馬喰畳町とも書き、砺波郡戸出村や徳市村、射水郡石丸から馬喰（馬や牛の取扱い業者）が移り住んだ馬喰町と、氷見から来て、畳屋を始めた畳町とが合併して馬喰畳町となりました。警備のための「木戸」が入口に設けられていました。

1786年、「高札場」が利屋町から通町の正面に当たる博労畳町の入口に移されましたが、1861年、橋番町に移転しました。今の博労町、博労本町です。

木戸・高札場 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

「高札場」が旅籠町に移った理由は、高札に馬をつないで通行の邪魔になったことや、冬に高札から雪が落ちて怪我人がでたこと、御車山の巡行の時に、取りはずす必要があったことなどからです。

職種を表す町名

旅籠町〈はたごまち〉

◆ 町名の由来

富山、四方、放生津あたりから移転してきた人々が、旅籠（宿屋）を営んだため旅籠町と名づけられました。小売商が多かったのですが、茶屋や寄席もありました。

北陸道、戸出（城端）道、井波道の交差点でもあり、重要な「宿場町・高岡」を代表する町でした。

町奉行・木戸・大木戸・高札場 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

横田町ができる1666年までは、この町が高岡町の西の入り口で、参勤交代には町奉行や町役人は、この町の角で送迎しました。

また、早い時期から「大木戸」があり、のちには、「木戸」がもう1か所設置されました。

1861年に、「高札場」がこの町のとなりの諏訪社横に移りました。

職種を表す町名

檜物屋町〈ひものやちょう〉

◆町名の由来

新川郡大場村から移住した庄左衛門が、木の板を合わせて家具を作る指物屋を始めたことから、指物屋町と称しました。のちにヒノキ材で薄い曲げ物を作る檜物屋が現れて、檜物屋町になりました。

1800年、中川原町出火の大火で全町63軒が焼失しました。

右／表紙「慶応三年歳末店下等留帳」大場良吉氏蔵
左／裏表紙「大場屋庄左衛門」

エピソード

檜物屋町は、「タンス屋まち」とも呼ばれ、町をつらぬく道を「タンス屋通り」といいました。一町内ほとんどが家具屋で、箪笥、長持、針箱、鏡台、膳など、多くは漆で着色され、「赤物」と称しました。仏壇も檜物屋町の特産で、1615年から作り始められ、1804年以後、盛んになりました。

職種を表す町名

千木屋町〈せんぎやちょう〉

◆町名の由来

千保川の川幅が広く底が深かったころは、「長舟町」と言っていましたが、のちに材木の集散地となり、千木屋町に改称しました。町の入口には、「木戸」が設けられていました。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

小馬出町の北にある千木屋町は、源平合戦にゆかりがあり、一の谷の戦で平敦盛を討った熊谷直実が開いた西福寺があります。地蔵堂には、小さなお地蔵さまに囲まれ、ひときわ大きく黒の衣を身に着けた耳地蔵もあって、由緒ある歴史を今に伝えています。

職種を表す町名　《現行の上桶屋町自治会》

桶屋町〈おけやちょう〉

◆町名の由来

高岡開町の頃に、初めて桶屋ができたことで名づけられ、1713年、桶屋町は、上桶屋町、下桶屋町に分かれました。

町の入口には「木戸」が2か所あり、1か所には「大木戸」が設置されていました。

1785年の戸数は47軒。1872年は57軒です。

1967年、大町の一部となりました。

木戸・大木戸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

ほんの一昔前までは、どこの家庭にも木製の漬物桶や味噌桶が台所の片隅にどっしりと置かれていました。

桶屋町の辺りでは、幕末頃になると、竹を素材とする傘作りが盛んとなり、洋傘が出回る1955年頃まで高岡の特産品のひとつでした。

ゆるやかな坂と大きな寺のある落ち着いた町並みです。

職種を表す町名　《現行の塩倉町自治会》

下桶屋町〈しもおけやちょう〉

◆町名の由来

1713年、桶屋町が上・下に分かれてできました。塩蔵があったことから、1925年に「塩倉町」と町名が変わりました。

1967年、大町の一部となりました。

エピソード

この町は千保川の右岸にあり、「河岸本蔵」（塩蔵）が置かれました。能登から運んできた塩はここで陸揚げし、この蔵に一時的に積み込み、古城本丸の御詰塩蔵へ運んで保管しました。

下桶屋町の塩蔵は、建築も修繕も塩問屋が負担し、番人も塩問屋が務めてきましたが、1852年から藩蔵に改められ、監守人も藩から任命されることになりました。

13代藩主の斉泰は、1850年4月、江戸から帰る途中、越中の海岸を巡察しており、この町の塩蔵にも立ちよりました。

職種を表す町名

油町〈あぶらちょう〉

◆町名の由来

八丁道には、かつて多くの石灯籠があり、夜には明かりを灯していました。その明かりなどのための油屋が、このあたりに多く移り住んでいました。

また、和傘の製造販売が盛んで、春から秋にかけて傘が一帯に干されている光景は高岡の風物詩でした。

油町の地蔵尊は、雄神川（今の庄川）の深い底から発見されたもので、大変ご利益があるとして信仰されています。1967年に、今の京町・大町の各一部となりました。

エピソード

油の原材料は菜種油で、灯用として毎日欠かすことのできない貴重なものでした。油の小売屋や、菜種から油をしぼる製油屋もあったと考えられています。

職種を表す町名

木町〈きまち〉

◆町名の由来

小矢部川と千保川の合流点の右岸にあり、高岡開町の際、資材を調達するために富山・守山木町の商人を呼び寄せ、高岡で最初にできた町です。

収納米の輸送をはじめ、小矢部川の本支流を上下する荷物一切の運送を認められる特権や、材木・薪・炭を独占して販売する権利を与えられていました。

エピソード

1773年の戸数は130軒、町民は716人で、材木商が35%、舟持が27%。このほかに船頭、舵取り、水手、浜稼ぎ、蔵番、筏師、材木商使用人などが住んでいました。

しかし、千保川の改修により、合流点から下の小矢部川も水量が激減。船着き場としての地位は、伏木浦へと移っていきました。

職種を表す町名《現行の大坪町2丁目自治会》《現行の大坪町3・4丁目自治会》

土器町〈かわらけまち〉

◆町名の由来

高岡城ができる前から北陸道に沿い、築城の際、城の背面にあたる重要な場所だったため、このあたりにも武家屋敷が置かれました。

廃城後、武士たちは金沢に引き上げ、その後、庄川の氾濫で大門方面から移住した人々により町立てされました。陶器をつくる業者がいて、窯跡や土器が出土したほか、畑地からも焼き物をのせる台などが発掘されています。

エピソード

ここから古定塚町に至る道沿いには、日蓮宗の4か寺、大法寺（現利屋町）、妙国寺（現片原町）、長蓮寺（現風呂屋町）、妙伝寺（現大町）と、真宗大谷派の2か寺、萬現寺（現本町）、光誓寺（現大坪町で当時と同じ場所）がありました。

職種を表す町名

白銀町〈しろがねちょう〉

◆町名の由来

刀剣の装具などに金属彫刻を付け加える「白銀師」が居住したことによります。

1704年頃、「木戸」が1か所あり、1736～44年頃まで残っていました。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

1873年、白銀町支分図に記載される60軒のうち、今も居住している家が7軒あります。

前田利長は、高岡城内に武器を製作する職人数十人を住まわせました。そのうち刀剣の装具などの金属彫刻で広く知られていたのは、後藤清重と安川乾清の2人です。

廃城後、後藤清重は金沢に移り、安川乾清はこの町に居住したようです。

職種を表す町名

大工町〈だいくまち〉

◆ 町名の由来

もとは射水郡下関村でしたが、瑞龍寺を建立するときに、大工と「大鋸屋（木挽）」が住んだため、大工町と名づけられました。

大工町、大工中町、大鋸屋町の三町は、江戸時代に「大工町三町」と呼ばれていました。

大鋸・木挽 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

前田利長のあとを継いだ利常は、亡き兄・利長の菩提を弔うため、1645年から約20年の歳月をかけて瑞龍寺を建立しています。その際に、大工小屋が設けられ、その後も大工などが住みついて町となりました。

職種を表す町名

大工中町〈だいくなかまち〉

◆ 町名の由来

瑞龍寺建立の際に、大工小屋があったことによります。

大鋸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

大工中町自治会には、江戸時代の絵図が5種類保存されています。大火や政変によって多くの町で消失しているなか、たいへん貴重な文化遺産です。絵図には屋号や名前などが記されているので、どんな人々が住んでいたか推測できます。

大工町三町（大工町、大工中町、大鋸屋町）ができた頃から約40年後の1699年の絵図が最も古く、戸数38軒のうち「大工」が15軒、「大鋸」が3軒あり、ほぼ半数が「大工」と「大鋸」であったことがわかります。

その後の絵図から、加賀藩が政策的な立場から瑞龍寺伽藍を整備・充実する時代があったこと、さらに江戸時代後期には一般庶民の人口増加が民家建築の需要をおこし、大工の増加につながったことなどがわかります。

職種を表す町名

大鋸屋町〈おがやちょう〉

◆ 町名の由来

千保川の東部にあり、1615年の高岡城廃城後、家臣が金沢へ引き上げた屋敷跡地の地子地に町立てされました。

町名は、前田利長の菩提寺である瑞龍寺建立に際し、木挽（大鋸屋）小屋があったことによります。町の中心部から離れていたため、たびたびの大火でも被害を受けることはありませんでした。

エピソード

1619年の戸数は37軒。1872年の戸数は、68軒。1884年の戸数101軒。1929年の戸数は100軒で、人口は477人です。

職種を表す町名

橋番町〈はしばんちょう〉

◆ 町名の由来

高岡城廃城後、家臣の屋敷跡地に町立てされました。町名は、横田橋（千保川）と横田小橋（中島川）の掃除と諸事取締役にあたる橋番人が住んでいたことによります。千保川右岸の低地にあり、たびたび水害に見舞われました。1861年、博労畳町にあった「高札場」がこの町に移転しました。今の川原本町の一部です。

町会所・高札場・間 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

1703年、横田小橋詰めに、橋番人用の御用屋敷として、幅5間（9m）、長さ10間（18m）が渡されました。

1743年頃には、16人の橋番人がおり、6人は川の堤防上の家に住み、残りの10人は地子地に住んでいました。この地代は「町会所」が負担しました。

1785年の戸数は19軒、1872年の戸数は21軒です。

職種を表す町名

神主町〈かんぬしまち〉

◆町名の由来

射水郡下関村の一部で、高岡城下町の家臣の屋敷地でした。

高岡町の南西の端で、高岡城の裏鬼門にあたり、町名は、神官の住まいがあったことによります。

高岡城築城のとき、下関村加久弥神社境内に、熊野社、稲荷社、山王社、八幡社が移り、町屋は多くはありませんでした。

エピソード

1841年作成の分間図には、山王社、槌宮、神主墓所をはじめ、18人の屋号と名前が記されています。寺町屋が3軒、赤祖父屋が2軒、横越屋が2軒などです。

1806年、関野神社（熊野社）、加久弥社、稲荷社、八幡社は、現在の関野神社地へ移転し、山王社のみが当地にまつられ、日枝社と称して今日に至ります。

職種を表す町名

母衣町〈ほろまち〉

◆町名の由来

町名の由来には、3つの説があります。

(1) 母衣徒士の邸宅があったこと、(2) 母衣を作る職人がいたこと、(3) 関野神社の祭礼に母衣武者行列が休息し、隊列を直して帰る習わしがあったことです。

もとは射水郡開発村領で、1824年、油町と地子木町の間の開発村領を開いて町立てしました。関野神社の高岡北端の氏子の地で、毎年5月1日の大祭には神輿の巡幸があります。今の京町の一部です。

エピソード

母衣町は、縄手中町、縄手下町とともに射水郡領家開発村（開発村）領を請地して町立てされ、三町あわせて、縄手三町と称しました。

人名による町名　《現行の源平町自治会》

源平板屋町〈げんぺいいたやちょう〉

◆町名の由来

高岡開町の際、和歌山から源平一門11軒が移り住み、紙屋、太物屋、小間物屋、仕立屋などを営んだ源平町と、射水郡放生津から引っ越した六右衛門一門が屋根板を売り出してできた板屋町が合併しました。

一番町、三番町とともに一番街通りと呼ばれ、前田利長から与えられた御車山を共同で管理しています。1895年、株式会社高岡商業銀行創業。翌年に、高岡商業会議所が設置されます。

太物屋 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

「享保13年源平板屋町絵図」（高岡市立中央図書館蔵）では、町の中を通る道幅は約7.4mで、広い道路を作った利長の都市計画の一部分をここにも見ることができます。

人名による町名　《現行の鴨島一区自治会》

鴨島町〈かもじままち〉

◆町名の由来

もとは射水郡鴨島村の一部で、「地頭」であった加茂嶋七郎の屋敷跡があったことによります。

井波往来（道）沿いで、北陸道や戸出往来に隣接し、交通量が多くありました。1663年頃、高岡への引っ越しを命じられた金沢の魚問屋の新保屋が、明治維新まで高岡の魚問屋を支配していました。2か所に「木戸」が置かれ、他に仏壇・仏具商もたくさんありました。

地頭・往来・木戸・馬借持 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

1821年の高岡大火では、「馬借持」4軒を含め全町97軒を焼失しました。1872年の戸数は100軒に増加しています。1879年、木舟町からの大火で焼け、真宗西派教恩寺が焼失しました。1929年の戸数は213軒、人口1,014人。1966年、一部が今の高岡市白金町の一部となります。

人名による町名　《現行の梶原町自治会》

梶原淵町〈かじわらふちまち〉

◆町名の由来

高岡に城下町がつくられたころ、千保川は庄川の本流で、川幅が広く、特にこのあたりは深い淵が所々にありました。

この河岸へ梶原源太の子孫を名のる五郎平という者がやって来て一家を構え、徐々に人家や寺院が建ち並んで町ができました。

梶原の姓と、深い淵のほとりにあることから名づけられたと伝えられています（地元では「カンジャマチ」とよばれました）。1904年、梶原町に変更しています。

エピソード　木戸・馬借持 ⇒ 用語解説 P.24

宗玄坂に「木戸」が設けられていました。1821年の高岡大火では、「馬借持」4軒を含め全町41軒焼失。1836年の飢饉の際には、窮民救済の食糧所が設けられました。

地形による町名

堀上町〈ほりかみちょう〉

◆町名の由来

高岡城外郭の「升形」の下に開けた町で、町内を流れる庄方用水（十七ケ用水）の上流に位置することから名づけられました。

用水を利用して染物業が盛んな町でした。

升形 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

高岡関野神社は「高の宮」とも呼ばれ、拝殿の奥には関野、高岡、加久弥の三社の本殿が並び、一体としてまつられています。5月1日、関野神社の春季例大祭の日に高岡御車山祭が行われ、午前11時に坂下町で曳き揃い、その後町々を巡ります。午後6時頃、堀上町に集まった7基の御車山は、高岡関野神社に向かって一礼後、それぞれの町へ帰っていきます。

地形による町名

片原町〈かたはらまち〉

◆町名の由来

この地には風呂屋が多くありましたが、金沢あたりからの移住者が増えて風呂屋は千保川右岸に移りました。町名は、当初、「涼分」（現あわら町辺り）の請地（借地）があり、片涼町と称していました。

後に、町の中を流れる庄方用水の北西側に町屋が並び、南東側が武家屋敷の林野草木の地であったことから片原町と変わりました。入口には「木戸」が設けられ、夜間は通行止めでした。

エピソード　木戸・馬借持・涼分 ⇒ 用語解説 P.24

片原町には、古定塚から本陽寺と本光寺が、土器町から妙国寺が、寺町から宗円寺が移ってきました。

1821年の高岡大火では、「馬借持」2軒を含め97軒を焼失しました。

地形による町名

川原上町〈かわらかみちょう〉

◆町名の由来

射水郡守山町の商工人が、高岡開町の頃に土器町に移住しましたが、火災のため再び移転し、千保川の東の川原に町を開いたと伝えられます。

江戸時代以来の魚屋の町で、魚などの取引を一手に引き受ける特権を与えられていました。

今の川原本町の一部です。

文政4年発行の「魚商売鑑札」
高岡市立博物館蔵

エピソード　馬借持 ⇒ 用語解説 P.24

1800年、中川原町からの火事が燃え移り、45軒が焼失しました。

1821年の高岡大火では、「馬借持」1軒を含め、全町49軒が焼失。

地形による町名　《現行の下川原東部、西部、中部自治会》

下川原町〈しもがわらまち〉

◆町名の由来

開町当時からの本町で、津幡江屋新兵衛、手洗野屋彦兵衛が最初に来たといいます。開正寺横付近は、1830年頃から幕末まで、芸妓の町として有名でした。江戸時代以来人でにぎわい、高岡唯一の芝居小屋「板橋座」や寄席「有楽座」が建てられました。

今の大町、川原町の各一部です。

エピソード

1800年の大火で全町が焼失し、1820年には下川原町より出火し、横川原町、梶原淵町、千木屋町へ延焼し、180軒を焼失しました。さらに1821年の高岡大火で全町132軒が焼失。1859年、千保川の洪水で床上浸水19軒、床下浸水73軒の被害にあっています。

地形による町名

坂下町〈さかしたまち〉

◆町名の由来

越後（新潟県）長岡から、後藤孫之進という武士がこの町に来て、武道を指導したのが始まりです。

町名は、御旅屋の台地から下がる坂にあることによります。坂の上の辺りを「坂髙町」とする史料もあります。小売商が多かったため、早くから警備のための「木戸」が設けられていました。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

8月2日の坂下町の夏祭には、「大神宮」と彫られた木札がまつられます。1615年、木町の神明宮旧地にあった松の大木から発見されたもので、1697年から極楽寺に安置されています。

高岡御車山祭では、7基の山車が坂の途中まで登り、下りてきます。城内参拝の名残と伝えられていますが、その地点は定塚町との境界にあたります。

地形による町名　《現行の定塚町1・2丁目自治会》

定塚町〈じょうづかまち〉

◆町名の由来

1628年頃、下関村の一部を開いてそこに古定塚町などから移住した人びとで町立てされました。

町名は、中川の熊野神社の祖先である利長坊という山伏が「入定」した塚が古定塚にあったことによります。利長坊は、「私の死後100年ののち、この世に現れ、この世を救ってみせる」と言い残しました。前田利長は自らその再生と信じ、この塚を保護したといいます。

入定・木賃宿・蹲踞場 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

定塚町は、北陸道が城の前を通るルートに変更されたので、城跡を見えなくするために町立てされたといいます。「木賃宿」が多くあり、町の南東端には「蹲踞場」がありました。

1745年、初期の大仏が造立されましたが、1821年の大火で焼失し、1841年復興。1900年の大火で再び焼失しますが、1933年に鋳銅の大仏が完成しました。

地形による町名

片原中島町〈かたはらなかじままち〉

◆町名の由来

1754年、射水郡鴨島村の一部を借り受けして町立てされました。

片原町に隣接し、片原町の中央を流れる庄方用水が町の西端で分かれ、町は用水にはさまれて、中の島の地形であったことによります。

片原町絵図 元禄十二年（1699）
（高岡市立中央図書館蔵）

エピソード

高岡地子町22町の1つ。

1800年、中川原町裏手から出火、この町にも燃え移り、27軒を全焼しました。

地形による町名

中島町〈なかじままち〉

◆町名の由来

千保川と支流の中島川との間の島に、横田村の農民が移ってできた町です。

加賀藩は1653年より1714年まで、庄川の本流を千保川から現庄川に変える川除普請（治水工事）を行いました。北陸道に沿い、中島川の舟着場としても栄えた町です。1854年頃、仏具屋甚右衛門が仏具の製造を始め、数尺の灯籠をつくっていました。

普請 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

1795年の洪水では、横田橋、中島橋が流され、1839年、1853年にも千保川大洪水の記録があります。

1896年には、庄川の堤防が決壊して、中島町のほとんどの民家が流される大惨事となりました。水死者の霊を慰め、水難防止を祈る水天宮祭が1914年から始まり、「灯籠流し」の行事となって今も続いています。

地形による町名

縄手中町〈のうてなかまち〉

◆町名の由来

千保川右岸に位置し、1824年、油町と地子木町の間の開発村領を借り受けして町立てしました。

ノウテとはナワテ（畷）が変化したもので、「あぜ道」を指します。田んぼ道に沿って町立てされたことから呼ばれ、「縄手」の字をあてました。

1952年、国道8号（現在の156号）が開通し、この町と北隣の縄手下町の間を通っています。

エピソード

1872年の戸数は81軒。1929年の戸数は79軒、人口は400人です。

地形による町名　《現行の五福町縄手自治会》《現行の五福町羽衣自治会》

縄手下町〈のうてしたまち〉

◆町名の由来

千保川右岸に位置し、1824年、油町と地子木町の間の開発村領を開いて町立てしました。

地理的に縄手中町の下手になるので、縄手下町と称しました。

1900年の高岡大火によって、下川原、新横町などで多くの店が焼失したので、この町の田園地域に羽衣町ができました。

銭札（預り手形）・炭谷洋子氏蔵

エピソード

1872年の戸数は73軒です。

建具、材木、石材、建築請負業の木綿久太郎家や、薪炭、石炭、コークスを商う室谷初蔵家など、千保川の舟運の利を生かした商店がありました。

軍事施設による町名

御馬出町〈おんまだしまち〉

◆町名の由来

越前（福井県）の吉十郎が開いたといわれます。「升形の内」の入口の大きな馬出の下にできた町なので、はじめ「大馬出町」と言われました。

藩主が参勤交代で通る道で、1711年に、「御本陣」が置かれました。

御本陣・町会所 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

「町会所」のあった二番町に隣接しているため、徳右衛門家が「散町寄合場」となって、会合していました。

また、1755年、加賀藩が銀札（領内で使うお札）を発行したとき、御馬出町に札座（藩札の発行を担当した機関）が設けられています。

世界的にも有名な化学者 高峰譲吉博士は、当町で生まれました。

軍事施設による町名

小馬出町〈こんまだしまち〉

◆ 町名の由来

信州（長野県）上田から安元四郎左衛門が移住し、武道の指導役を始めました。そのため信濃町と言っていましたが、台地上の大きな馬出の下にある御馬出町に対し、小さな馬出の下にできた町「小馬出町」と名づけられました。

「馬出」とは、城の入口の前に設けられた陣地のことで、現関野神社前と大仏前に近い坂下町の上の方に「升形」を設け、城の前の前線基地としていました。

エピソード 升形・馬借持 ⇒ 用語解説 P.24

小馬出町は守山町・木舟町とともに「通り筋三町」と呼ばれる高岡町の中心地であり、問屋街でした。1821年の高岡大火では、「馬借持」25軒を含む全町83軒を焼失しました。

人口増による町名

地子木町〈じしきまち〉

◆ 町名の由来

木町の商業が盛んになるに伴い、人口が増加し、地子地に家屋を増築して町の規模が大きくなりました。そこで、1640年に、射水郡開発村の土地を請地（借地）して地子木町が町立てされました。開発町の九右衛門という者が最初に来て住んだと伝えられています。

1956年、千保川の対岸の内免神明町と当町を結ぶ地子木橋が完成しました。

安政4年発行の「舟の艦札」鷲北光則氏蔵

エピソード

木町が拡張して成立したこと、また木町に隣接することから、木材・薪炭を扱う商人が多くいました。

人口増による町 《現行の下川原東部、西部、中部自治会》

横川原町〈よこがわらまち〉

◆ 町名の由来

1720年に、小馬出町と下川原町の一部が一緒になってできた町です。千保川の東部、高岡城跡の西に位置します。

この町は、幕末には10数軒の料理屋が軒を連ねました。1889年、高岡町の市制施行に伴い、下川原町と合併しました。

エピソード

1800年、中川原町裏手から出火して燃え広がり、横川原町36軒を全焼しました。1855年には、千保川が出水し、床上浸水19軒、床下浸水21軒に及ぶ被害を受けました。1863年、下川原町から出火し、29軒が焼失しました。

1655～57年頃に、真宗大谷派開正寺が創建されています。

人口増による町

横田町〈よこたまち〉

◆ 町名の由来

千保川左岸の北陸道に面し、町続きの横田村の村人が住むようになってできた町です。参勤交代の通路にあたり、高岡町の入口であったため、「蹲踞場」が置かれました。当初は岩坪渡しへ通じる2間ばかりの道（西町へ出る道）にありましたが、1813年、横田新町の東へ移動しています。町の入口に、「大木戸」が設けられていました。鎮守は、1612年に横田村から移した八幡宮で、太田雨晴の有磯神社と合祀し、有磯八幡宮となり、その後有磯正八幡宮に改称されました。

エピソード 蹲踞場・間・大木戸・町奉行⇒ 用語解説 P.24

1666年、地子地350坪と横田村からの請地により横田町を新設し、町奉行の支配になります。ところが元から住んでいた農民は、郡奉行支配のままでした。そこで1671年、農商分職を発令して町人と農民の雑居を禁じ、地内の農民を横田村に移転させました。

人口増による町　《現行の千石上町自治会》《現行の千石上町二区自治会》

横田新町〈よこたしんまち〉

◆町名の由来

1645年、古定塚町から移転した職人が横田村から請地して町立てしました。今の千石町、扇町一丁目の各一部です。

エピソード

1872年の戸数は18軒。1929年の戸数は23軒。人口は、94人です。

道の役割による町名

通町〈とおりまち〉

◆町名の由来

北陸道筋で戸出（城端）往来、井波往来が交わる交差点に面する地域は小売商の中心街でした。町の名は、この町を通って他の街道に連絡することから名づけられました。

往来 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

北陸道を金沢方面から来ると、高岡町西端の横田町から千保川を越え、旅籠町で北東に曲がると通町に入ります。この町を通り、利屋町の大法寺の前で御馬出町へ曲がると、高岡町の中心地に入ります。

また、通町西端の辻は、戸出往来・井波往来の起点でした。この町を通らなければ他の街道へ行けないという通町は、街道が合流する交通の重要な場所で、多くの人が行き交い、にぎわった町です。

道の役割による町名

立横町〈たてよこまち〉

◆町名の由来

高岡城廃城後、家臣の屋敷跡地に町立てされました。道路が、「曲尺」（L字型の金属製のものさし）のように直角に曲がっているので、その形状から名づけられました。今の大町の一部となりました。

エピソード

1800年、中川原町裏手から出た火は、立横町にも広がり、全町26軒が焼失しました。1785年の戸数は24軒。1872年の戸数は31軒。1929年の戸数は33軒、人口は136人です。1967年に、今の大町の一部となります。

町の立地による町名　《現行の白銀后町自治会》《現行の鉄砲町自治会》

白銀後町〈しろがねごちょう〉

◆町名の由来

白銀町の南東に続く地子町です。この町の南東部に足軽屋敷があったため、この地域を「足軽町」と呼び、後に「鉄砲町」と呼ばれました。町附足軽ははじめ20人でしたが、1658年、12人を金沢に帰し、8人を瑞龍寺門番としました。1660年、再び足軽12人が加賀藩から派遣され20人となり、1677年、藤田七郎右衛門が足軽小頭に任じられて21人になりました。今の白金町、末広町の各一部です。

目安場・町奉行 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

1637年に「目安場」が設置され、町奉行の伊藤内膳が「目安場奉行」を兼ねていました。「目安場」は1652年に廃止され、跡地内には、囚獄所が建てられました。牢舎の周りには二重柵がめぐらされていました。

上川原町〈かみがわらまち〉

◆町名の由来

千保川右岸にある魚屋の町です。魚類の取引を一手に引き受ける特権を与えられていました。

生魚のほか塩干魚を扱う商人「四十物師」が集中し、四十物町とも呼びました。江戸中期より（1772年頃）イワシ類の税金が軽くなり、これを喜んで「鰯祭り」が行われるようになりました。1821年、上川原町から出火し、2日間にわたり37か町に燃え広がり、2,369軒を焼失、死者38人に及びました。

エピソード

1785年の戸数は42軒。1872年の戸数は45軒。1880年、千保川岸に魚鳥会社（魚や鳥をあつかっている会社）、1888年、魚商会社（魚を販売している会社）が設立されました。

中川原町〈なかがわらまち〉

◆町名の由来

高岡城廃城後、家臣の屋敷跡地に町立てされました。1800年、四津屋長兵衛持納屋の辺りから出火し、9か町に延焼しました。焼失家屋は418軒、潰家26軒、納屋65軒、蔵6棟に及び、専称寺も焼失しました。

今の川原本町の一部です。

エピソード

地子町で、1785年の戸数は、24軒。1800年の火災で、川原町の四十物屋が塩干魚を製造する道具を焼かれ、復興のめどが立たず、役所から銀子15貫目が貸し出され、川原町の復興に役立てられました。

片原横町〈かたはらよこまち〉

◆町名の由来

片原町の横にできた町です。高岡城廃城後、家臣の屋敷跡地と射水郡鴨島村の開墾地の各一部を合わせて町立てされました。

1704～10年頃、すでに2か所に「木戸」が置かれていました。1913年、高岡市役所が移設され、高岡市の政治の中心となりました。

木戸 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

この町にある「無影の井戸」は、鏡よりもはっきり人影が映ると評判でしたが、ある時、影が映らなかった人が突然亡くなり、人々は、影が映るか確かめにくるようになったと伝えられています。

また一説には、一番新町の石瀬屋六兵衛（孝子六兵衛）が、ここで影の無い赤衣の異人に出会い、六兵衛に「近いうちに福を与える」と告げ、突然姿を消したので名づけられたともいいます。

《現行の関町自治会》

蓮光寺門前〈れんこうじもんぜん〉

◆町名の由来

高岡城廃城後にできた地子町で、町名は、蓮光寺の門前にできたことに由来します。

明治初期に、今の関町に合併しました。

エピソード

高岡町には門前町が2町あり、「蓮光寺門前」と「教恩寺門前」です。蓮光寺は井波瑞泉寺の下寺で、教恩寺は伏木勝興寺の通寺（＝下寺）でした。

1861年当時、町頭は大工中町の町頭が兼ねていました。

教恩寺下町〈きょうおんじしたまち〉

◆町名の由来

千保川東部に位置します。高岡城廃城後、家臣の屋敷跡地に町立てされました。

町名は教恩寺の西側にあったことによります。今の鴨島町の一部です。

エピソード

1785年の戸数は10軒です。明治初期に、鴨島下町に合併されましたが、合併年度はわかっていません。

鴨島下町〈かもじましたまち〉

◆町名の由来

千保川東部に位置し、射水郡鴨島村の人によって町立てされました。低地にあったので、たびたび洪水の害を受け、1859年の千保川の出水では、床上浸水が8軒、床下浸水が4軒ありました。

明治初期に、教恩寺下町を編入しました。1896年の千保川の大洪水で、町は流失の危機に瀕し、小舟を出して老人や子供を避難させました。

エピソード

町頭役は、教恩寺下町をも兼ねて、1861年には、鴨島町の千代屋又八郎と山屋吉左衛門が務めていました。

1685年には、真言宗当山派の大乗院と大福院の2か寺がありました。大福院は片原町へ移り、今は木津にあります。

宮脇町〈みやわきちょう〉

◆町名の由来

千保川の東部に位置し、1855年、射水郡下関村領を開いて町立てしました。

町名は、関野神社に隣接していることから名づけられました。近くを流れる庄方用水の美しい水を利用して、染物屋が繁盛しました。

エピソード

1893年、下関、旧旅屋門前の各一部を編入します。1904年、一部は旧旅屋門前の一部とともに末広町となりました。

新横町〈しんよこまち〉

◆町名の由来

1855年、射水郡下関村領と、藩の御林地を合わせて町立てしました。町名は、新しく開いた横通りの町であったことによります。

明治期には、桜馬場の桜を臨む飲食店などの密集地でした。伊藤博文など政治家も利用しましたが、1900年の大火で、料亭や劇場などが焼失し、それらの店は羽衣町や桐木町に移転し、新横町は住宅街となりました。今のホテルニューオータニ高岡のあたりです。

エピソード

1898年、旧旅屋門前の一部を編入しました。1966･1968年に、新横町の一部が今の東下関、大手町の各一部となりました。

開発町〈かいほつまち〉

◆町名の由来

高岡城築城のための材木や石などを運搬する人々が住み、また侍屋敷（50軒）もありました。

1953年、住宅地が独立して開発町一丁目となり、また、1960年、県道守山向野線の完成に伴い住宅が増加。一丁目に続く住宅地域が独立して、二丁目となりました。

小字 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

明治時代になっても、御影石の大きな切石が竹藪にたくさんあり、築城用の石の余りと伝えられていました。

開町当初は「大掛町」と称していましたが、1643年に開発町と改められました。ちなみに、熊野神社（現熊野町）の東に「大懸」の「小字」が残っています。

二丁町〈にちょうまち〉

◆町名の由来

はじめ、「二時町」と称しましたが、1681年、二丁町に改められました。源義経の名を冠する母衣武者を所有しています。

1800年、中川原町の大火で、全町59軒が焼失しました。今の川原町、川原本町の各一部になります。

エピソード

1785年の戸数は52軒。1872年の戸数は56軒。1887年、簡易小学校が設置されます。

1897年頃、高岡打綿会社が創立し、1907年、栄町に新築移転しました。

1929年の戸数は58軒、人口は331人。1965年の世帯数は35世帯、人口は158人でした。

関町〈せきまち〉

◆町名の由来

高岡町の開町によって、旧地名の「関野」がなくなることを惜しんで、前田利長が命名したと伝わります。1613年、広山恕陽和尚が曹洞宗法円寺を開きます。1614年、前田利長逝去ののち、1645年より約20年の歳月をかけて壮大な寺院が建立され、その戒名「瑞龍院」より瑞龍寺と改められました。

エピソード

関町は、高岡町の南端にあり、高岡城を築く以前から天景寺があったと伝えられ、開町時に総持寺、それに加え、開町3年後に移転してきた蓮光寺の3か寺が、瑞龍寺ができるまでの高岡南端の守りでした。

かつて関野の周囲には、上関村、下関村があり、今も上関町、関大町、関本町、下関町、東下関、西下関など、江戸期以前の地名に由来する町名が伝えられています。

横町〈よこまち〉

◆町名の由来

北陸道筋の小馬出町と平米町の間の町で、氷見・伏木往来に面していたので、小売商の中心街でした。1925年に「元町」、1968年に「本町」と改められました。

往来・升形 ⇒ 用語解説 P.24

エピソード

開町当時、北陸道は、小馬出町からまっすぐ横町、平米町、土器町へとのび、古定塚町へと右折していました。

高岡城は廃城となり、これに伴って「升形」の内の通行を避ける必要がなくなったことから、1628～29年頃、北陸道を小馬出町で右折し、坂下町から定塚町へと付け替えました。

この町は、北陸道からそれましたが、その後も氷見・伏木往来沿いの小売商店街として繁盛しました。

江戸時代の高岡のまちが、もっとわかる！

高岡タイムスリップ辞典

町奉行 町会所

江戸時代の高岡は、「高岡町」といいました。町を治める責任者は、「町奉行」という役の武士です。2名いて、交代で金沢から高岡に来ました。

1652年、二番町に「高岡町奉行所」がつくられますが、1767年に焼失し、再建します。この時から、名前を「高岡町会所」としました。

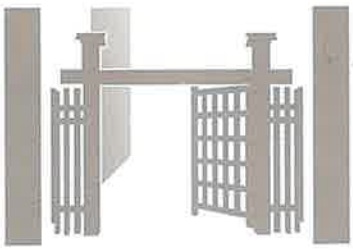
1889年、最初の「高岡市役所」が建てられたのは、その当時の町会所の場所です。

木戸 大木戸

「木戸」は、江戸時代に、町のさかいなどに作られた木製の扉のことです。防衛や防犯のために作られました。

木戸番という番人がいて、夜は閉められ、通行ができませんでした。

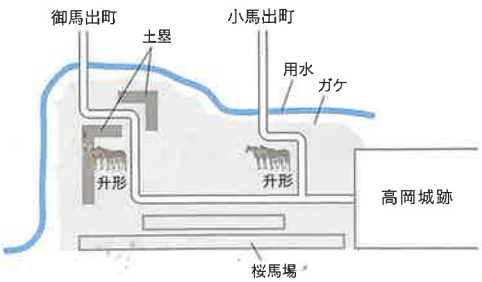
「大木戸」は、その大規模なもので、重要な所に設置され、人や物の出入りを見張っていました。



升形

「升形」とは、敵の直進を防ぐため城の内外に石垣や土塁で囲む四角い空間のことで、通常2か所に門を設け、敵を挟み打ちする場所です。高岡には、関野神社付近と、坂下町の上の方にありました。

城や郭の出入口の前面の防御・出撃の拠点で石垣・土塁で囲まれた場所が、「馬出」です。



火灯人

八丁道に多くあった石灯籠に、毎晩、明かりを灯す役目を担っていた人のことです。

拝領地

利長は、鋳物師を呼び、金屋町に土地を与えて優遇しました。この土地を、「拝領地」と呼びました。

高札場

幕府や藩が決めた法律や決まり事などを、高札という木の札に書き、目立つように掲げた場所のことです。

町の中心部や人通りの多いところに置かれ、屋根や柵がついていました。

幕府や藩が、新しく決まったことを人々に知らせるためにつくった掲示板といえます。

大鋸

木材を、縦方向に切るために、2人で挽く大きなノコギリのことです。

木挽

大鋸で木材を切ること、またはそれを行う職人のことです。

太物屋

綿や麻でつくった織物をさします。絹に比べて、糸が太いことからです。

地頭

土地の領主、または現地で土地を管理する人のことです。

馬借持

「馬借」は、馬で荷物を運ぶ人です。今の運送業にあたります。

蹲踞場

町の役人が、参勤交代で往復する藩主を送迎した場所です。蹲踞とは、体を丸くしてしゃがむこと。高岡には、東西2か所にありました。

普請

道や橋、堤防などの土木工事のことです。

御本陣

参勤交代などで、大名などが使用した宿舎のことです。

湶分

「湶」は湧き水のある湿地帯のことです。高岡城の北方の5千坪ほどの「湶」が江戸前期以降に村となりました。

入定

高僧や聖者が悟りを得るため土や火、水の中に入って死ぬことです。

木賃宿

「木賃」とは薪代のことです。米を持参し、薪代を払って泊まる安宿を「木賃宿」といいました。

目安場

「目安」とは、訴状のことです。目安を受け取り、解決する場所を「目安場」といいました。

往来

人が行き交う道路のことです。

字

市町村の区画の名のことです。大字、小字がある、「○○町字□□」と書きます。

間

尺貫法で使う長さの単位で、柱と柱の間隔を1間としました。約1.8メートルです。

歴史めぐりまち歩き半日コース

山町・金屋町、歴史的町並みをめぐる

Aコース 2.3km

1. 高岡市土蔵造りのまち資料館（旧室崎家住宅） 日本遺産
   - 小馬出町　土蔵造りの町並み

2. 菅野家住宅・筏井家住宅 日本遺産
   - 木舟町

菅野家住宅

3. 津幡屋与四兵衛顕彰碑 日本遺産
   - 守山町・御馬出町・二番町・鴨島町
4. 川巴良諏訪神社
   - 放籠町・橋番町・中島町
5. 越中古社 有磯正八幡宮 日本遺産
   - 横田町
6. 高岡市鋳物資料館
   - 金屋町
7. 旧南部鋳造所（キュポラと煙突） 日本遺産
   - 金屋町
8. 金屋縁地公園・高岡鋳物発祥の地碑
   - 金屋町　千本格子の家並み

高岡鋳物発祥の地碑

恵比須塔

9. 新幸橋・恵比須塔
   - 一番新町・二番新町
10. 高岡御車山会館
    - 利屋町・檜物屋町・中川原町

近くの歴史スポット

- ●町会所跡（永明寺）
- ●長崎市右衛門を讃える石碑

中心商店街、高岡大仏、桜馬場通りをめぐる

Bコース 2.6km

1. 関野神社
   - 堀上町
2. 高の宮通り
   - 宮脇町
3. 御旅屋通り
   - 高岡大仏 日本遺産
   - 定塚町

5. 坂下町通り
   - 坂下町・片原中島町
6. 無影の井戸・孝子六兵衛の碑
   - 片原町・片原横町

無影の井戸

7. 大伴家持像（高岡駅北口駅前広場）
   - 宮脇町

8. 桜馬場通り
   - 新横町
9. 大手町神明社拝殿 日本遺産
   - 定塚町
10. 高岡市立博物館

近くの歴史スポット

- ●室崎琴月胸像　●ぎんぎんぎらぎらブロンズ像
- ●瀧の白糸の碑

近くの話題スポット

- ●ドラえもんの散歩道（ウイング・ウイング高岡広場）
- ●高岡市ドラえもんポスト（高岡駅）

前田家ゆかりの地をめぐる

Cコース 2.7km

1. 前田利長墓所 日本遺産

2. 瑞龍寺 日本遺産
   - 関町

3. 総持寺・槌宮神社

総持寺

槌宮神社

境内の中をJR城端線が通る！

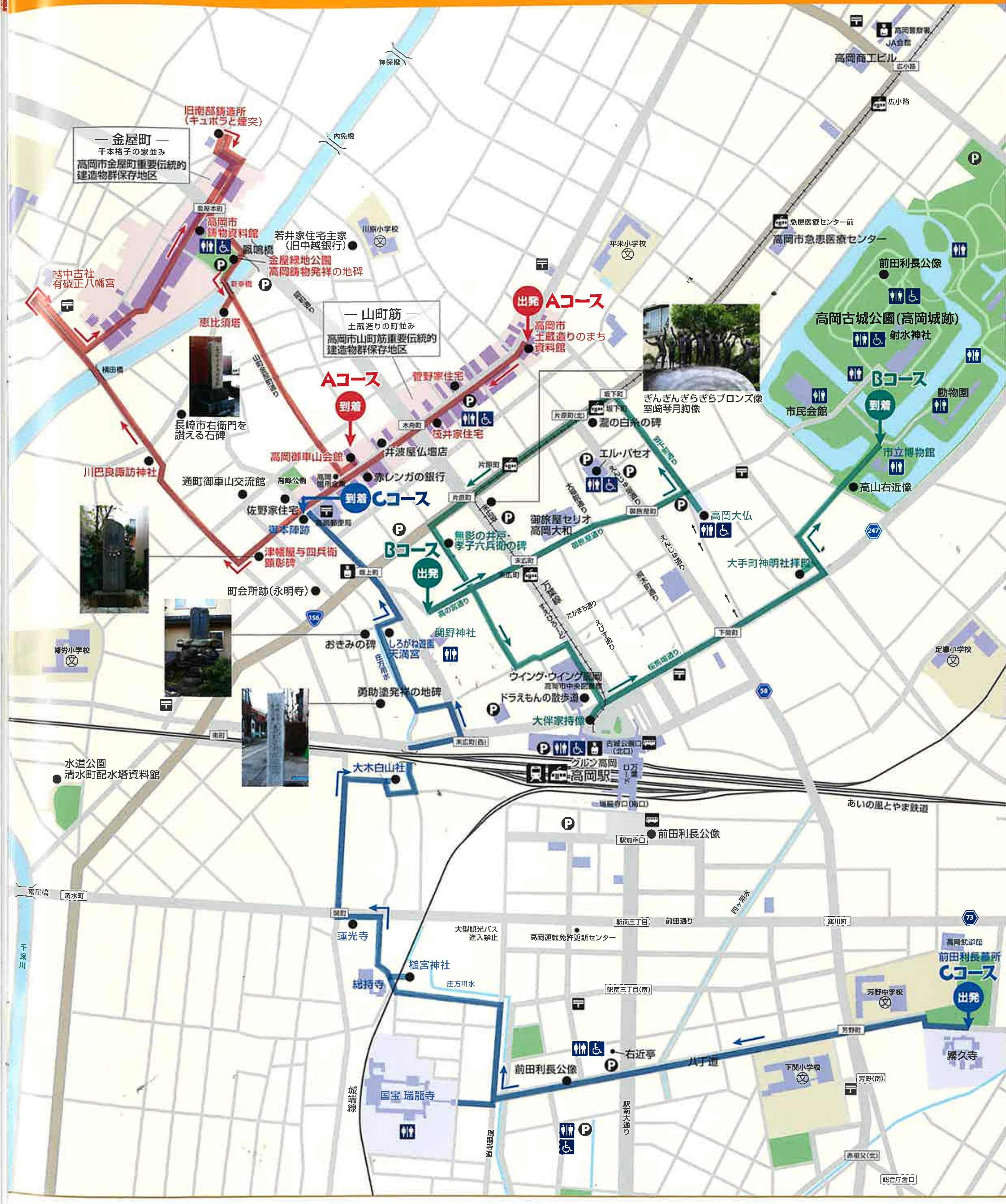
4. 蓮光寺
   - 蓮光寺門前
5. 大木白山社
   - 大工中町

街なかで鯉が見られる！

6. 庄方用水
7. しろがね遊園天満宮
   - 白銀後町
8. 御本陣跡（NTT西日本高岡局市外分局）
   - 御馬出町

近くの歴史スポット

- ●烈女「おきみ」の碑
- ●伝統工芸高岡漆器 勇助塗発祥の地碑
- ●八丁道　●繁久寺



裏表紙 高岡歴史クイズの答え

Q1…A P.13参照　Q2…C P.12・20参照　Q3…E P.8参照　Q4…B P.2参照　Q5…C P.10参照　Q6…C P.9参照

Q7…A P.5参照　Q8…A P.17・25参照　Q9…D 表紙右上参照　Q10…A P.1参照　Q11…高岡大仏と旧南部鋳造所 P.26地図参照

Q12…戸出御旅屋の門 → 御印祭 → 有礒正八幡宮 → 高岡御車山 → 菅野家住宅 → 山町筋 → 金屋町 → 高岡市土蔵造りのまち資料館 → 旧南部鋳造所 → 前田利長書状 → 棚田家住宅 → 北前船資料館 → 五福町神明社本殿 → 能松家住宅 → 有藤家住宅 → 勝興寺 → 伏木港 → 高岡城跡 → 大手町神明社拝殿 → 高岡大仏 → 筏井家住宅 → 与四兵衛顕彰碑 → 瑞龍寺 → 前田利長墓所

高岡歴史クイズ

全問わかるかな?

答えは26ページにあるよ!

Q1

油町は、油屋さんが多く住んでいたことから町名がつけられましたが、何に使う油を扱っていたでしょうか?

A 灯籠の明かりに使う油　B 工業機械に使う油
C 車に入れるガソリン

Q2

町名の組み合わせで違う答えがひとつあります。違っているものはどれ?

A 白銀後町=足軽町=鉄砲町
B 桶屋町=下桶屋町=塩倉町
C 博労畳町=御馬出町=小馬出町

Q3

職種を表す町名でないものがひとつあります。どれでしょうか?

A 風呂屋町　B 大工町　C 旅籠町
D 橋番町　E 袋町　F 檜物屋町

Q4

現存する最古の高岡の町図はどの時代に作成されたでしょうか?

A 1609年(慶長14年)　B 1771年(明和8年)
C 1859年(安政6年)

Q5

金屋町は、江戸時代に藩主前田利長が高岡に産業をおこすためにつくられた町です。その産業とは何でしょうか?

A 漆器　B 染め物　C 鋳物

Q6

御車山のなかで1基だけ、車輪が2輪のものがあります。どこの町の山車でしょうか?

A 木舟町　B 通町　C 二番町

Q7

古城公園にある馬上の利長像。正しいのはどれ?

A
B
C

Q8

高岡大仏の手のかたち。正しいのはどれ?

A
B
C

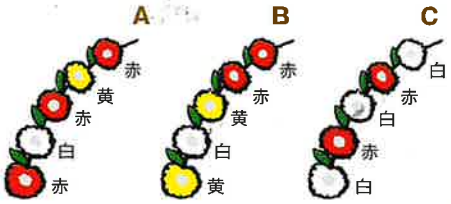
Q9

前田家の家紋「梅鉢の紋」はどれ?

A
B
C
D
E

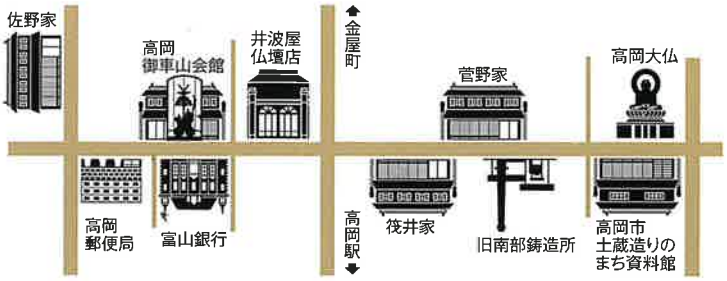
Q10

御車山の花傘で、正しい色の順はどれ?



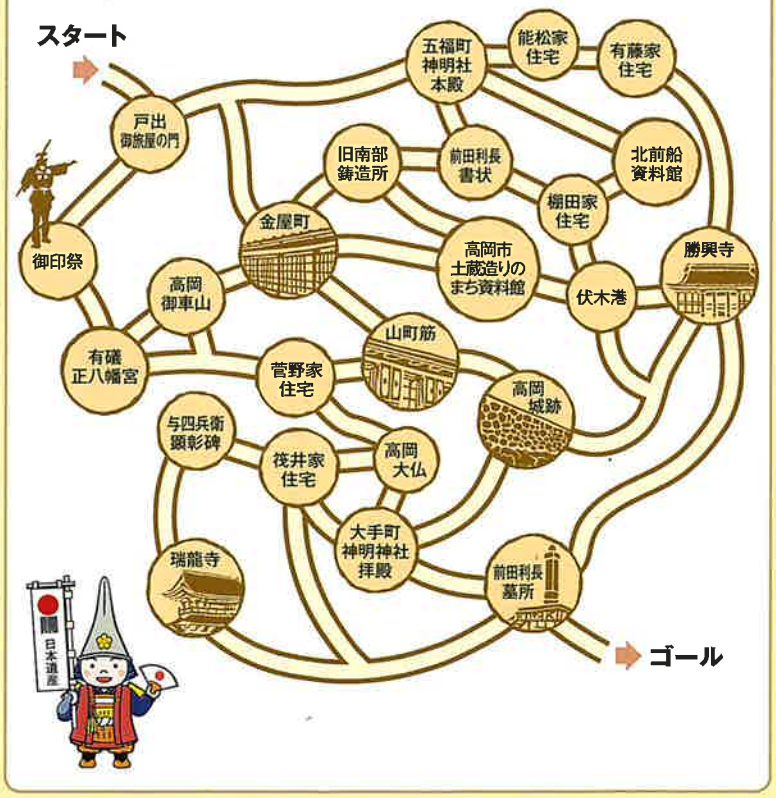
Q11

土蔵造りの町並みの地図に、実際の町並みと違う部分が2つあります。探してください。



Q12

同じ道、スポットを通らずに全ての日本遺産ポイントをまわってゴールしてください。



発　行／高岡市日本遺産推進協議会(高岡市共創まちづくり課 TEL.0766-20-1326)
企画・編集／高岡商工会議所 TEL.0766-23-5000
協　力／高岡市立博物館
参考文献／高岡市立博物館常設展ガイドブック、高岡文化情報誌きらめき「江戸時代の高岡の町々」、高岡市史、日本歴史地名大系(平凡社)、角川日本地名大辞典
2016年3月発行